

自由な魔導師の日常

ナタク

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

自由気ままな魔導師が、幻想の少女達との日常を描く。ただそれだけ。

目次

プロローグ	1
博麗霊夢との日常	3
霧雨魔理沙との日常	6
ルミアとの日常	10

プロローグ

幻想郷。

人と人外が共存する世界。

妖怪、妖精、魔法などが当たり前のように存在している。

日本の山奥に存在するとされる、結界で隔離された土地で、いわゆる「異世界」じゃなく、外の世界と陸続きに存在する世界だ。

共存すると言つても、妖怪が人を喰えば、その妖怪を退治する人間もいて共存とは言い難いが、それがこの世界の在り方だ。

この世界は妖怪の賢者と呼ばれる、一人の妖怪の力にて生まれた世界で、その賢者が作ったルールが存在する。

そのルールを破れば、この世界から追放されるか、最悪その賢者に亡き者にされるかだ。

この幻想郷には、博霊大結界と呼ばれる結界が覆っている。

管理人は代々の博麗の巫女が担当している。物理的な結界ではなく論理的な結界であり、それは思いを通さない壁と言う機能で存在し、同時に思いに影響を受ける。

基本的に強力に遮断・隔離されて、時折結界をまたいで人や物が世界の外から中に流れ込み、逆に中から外に出してしまうことが何度もあった。

神隠し。

それが主な実行犯は結界を弄ることが出来るのは妖怪の賢者ただ一人だけだ。結界を管理している博麗の巫女も結界を緩めたりし、幻想郷の中のものを外に出したりできるらしい。

幻想郷は元から隔離されてははなく、多くの妖怪が暮らしていた土地に、それを退治する家業としていた人間がやって来て住み始めた辺鄙な土地だった。

いくら共存関係であっても、色々と問題は多々発生していた。

結界が張られた後は幻想郷を維持するために、人間と妖怪の間に数や勢力のバランスが必要になり、

そのため人間はこれ以上妖怪が減っても増えても困るため妖怪を

完全に退治しなくなり、

妖怪もこれ以上幻想郷の人間が減っても増えても困るため幻想郷の人間を襲うことはほとんどなくなってしまう

その代償として幻想郷の妖怪たちは存在意義を失ったことに、気力が衰えていった。

そんな時、外の世界から吸血鬼達が現れ、気力を失いかけた妖怪達と共に、幻想郷を支配しようとする企んで暴動を起こしたが、博霊の巫女や妖怪の賢者達が行動して難して、事が収まった。

そんなこんなで生まれた幻想郷にて自由気ままに過ごすのが普通になって来たのを感じる今日この頃。

おっと自己紹介が遅れたな。

俺はシンヤ。しがないただの魔導師で、

妖怪の賢者が起こした神隠しによって、この幻想の地に辿り着き、もう何年生きているかもわからなくなった旅人さ。

と言っても、自由気ままには過ぐせないのがここの生活なんだなこれが。

博麗霊夢との日常

博麗神社。

博麗の巫女が代々受け継いできた神社で、前に話した博麗大結界の管理場所な所で、外の世界と幻想郷の境に位置する。

博麗の巫女は、妖怪退治や異変と言った仕事に全うしている。

博麗の巫女が幻想郷にとっても重要な存在で、どれくらい重要かというと、

妖怪退治をしようとも妖怪は巫女を襲うことはおろか、博麗神社の境内に來た人間に手出しするのを禁じられているまで。

そんな博麗神社の巫女、博麗霊夢は境内の清掃に専念していた。

異変や妖怪退治の仕事がない時などは、普段からこんな感じである。

音を立てながら掃除している霊夢は時々、神社の縁側にて熟睡する人物に、視線を送る。

縁側にて熟睡するのは、青を基準とした長い髪をしており、親友の魔法使いとは違う白い服装を着込み、魔法使いが使う特有の枝を持ちながら熟睡するシンヤだった。

天気日和の時は、こうして日向ぼっこしながら熟睡している。

清掃が終え、清掃道具を片付けた霊夢は、熟睡しているシンヤの隣に座り込む。

そして、熟睡するシンヤの隣にて霊夢はお茶を啜りながら、庭を眺める。

霊夢「しかし良く寝るわね、おじさん」

熟睡するシンヤの寝顔を眺めながら、そう呟く。

おじさん。霊夢だけがシンヤを呼ぶ時に使われる名前で

霊夢が幼い頃から、そう呼んでいる。

霊夢（まだ、お母さんがまだ現役だった頃かしら。おじさんと出会ったのは）

（おじさんに会ったのも、この縁側で今の様に熟睡していて、初対面だったから驚いたけど）

(おじさんとお母さんは、異変解決とか妖怪退治の時もいつも一緒だった)

(おじさんとお母さんは、お互いに愚痴や口文句を言い合ったことが何度もあって、おじさんじゃなく、お父さんと呼んだ方が良いのかと思う位、仲が良く、皆から夫婦じゃないの?とよく間違われてた)

(お母さんがいなくなった後でもおじさんは、私の面倒を見てくれた)
(おじさんがいなかったら、今の私はいなかっただろう)

色々と懐かしそうに思っていると、傍で熟睡していたシンヤが目を覚まして起き上がる。

「あれ?俺結構寝てた?」

霊夢 「寝てたわよ。気持ちよさそうにね」

「あれま」

霊夢 「・・・、ねえおじさん」

「なんだ霊夢?」

霊夢 「お母さんから聞いたけど、おじさんは私やお母さんが生まれる前、つまり今までの先代達を見てきたのでしょ?」

「そうだよ。俺がこの幻想郷にやって来る前に、いや、幻想郷が生まれるその前にも会ったことがあるな」

「初代博麗の巫女から続く歴代巫女達、色んなやり方があったが、誰も素晴らしい巫女だったよ」

霊夢 「へえ。私のお母さんとかも?」

「当たり前だよ。そして、霊夢も素質があるからねえ。」

歴代の巫女と同じような人になると私は思うよ」

霊夢 「おじさんがそう思うだけでしょう?」

「そうだね」

二人で語り合っていると、辺りの空が夕焼け色に変わっていくのがわかった。

「夕時か・・・。帰ることは出来るが、どうしたものか」

霊夢 「もう今日は泊まっていけば?二人分くらいの食材ならあるし」

「おや?良いのかい?」

霊夢「もう日が暮れるし魔導師と言っても、おじさん人間よ。危なくteしょうが無いわ」

「それなら、お言葉に甘えて泊まりますか」

霊夢「なら、色々と手伝ってもらおうわよ。おじさん！」

「はいよ。どうぞ、扱き使つて下さいな」

二人はそう言い合いながら、夕食の支度の為に台所へと向かった。

霧雨魔理沙との日常

幻想郷にある森、魔法の森。

険しい表情を浮かべたシンヤが、ある一軒家の前で止まる。

「霧雨魔法店」

とある知り合い魔法使いの弟子の自宅で、何度か訪れる機会があったので、弟子さんとの交流もある。

今回は、週の最後にある仕事を行う為に此処にやって来た。

シンヤは霧雨魔法店のドアをノックし、おーい。と声を掛けると、

(霧雨魔法店は昼時までお休みだぜ)

ドア越しからの室内から聞こえた言葉に、シンヤの怒りがこみ上げて来た。

おい！起きろこら！と今度は大きな声を上げるが、ドア越しから聞こえるのは、

(うるさい・・・！もう少し眠らせてくれよじじい・・・！)

そんな暴言だった。

流石に頭にきたシンヤは、ドアを開けようと昔貰った合鍵を使って開けようとしたが、魔法で開けない様になっていたのがわかった。

更に頭にきたシンヤは魔法の枝で、ドアに付けられている魔法を無理矢理解除して、こじ開けて中に突入する。

ゴミ溜めの廊下を歩いて、この家の主の寝室の扉を蹴破って突入すると、

ゴミ溜めの寝室に、白い下着を着けて爆睡する金髪の少女、霧雨魔法店の主の「霧雨魔理沙」がそこにいた。

「起きやがれ魔理沙!!」

「うわあ!?!」

暴言を吐いてもなお爆睡する魔理沙の姿に、堪忍袋の緒が切れたシンヤは、眠る魔理沙をベッドのシーツごと、引きずり下ろす。

いきなり引きずり下ろされ、そのまま魔理沙は後頭部をゴミ溜めの床に打ち付ける。

魔理沙「いつてー！何すんだぜおっさん！」

「うるせえ！週の最後は此処に来て、大掃除するから、家の鍵は開けとけと言っているのに、魔法まで掛けるとはな！」

魔理沙「だっておっさん、私の秘蔵コレクションや魔道書なんかを全て片付けたり捨てるじゃないか！」

「お前の言う秘蔵コレクションは、自分で使い道のわからないガラクタで、魔道書とかは盗んだ物だろうが」

魔理沙「なっ!?!ガラクタとか言うなよ！それも魔道書は盗んだじゃない！借りただけだぜ！」

「はいはいわかったから、ささつと服着て、髪を整えて、外に出なさい」
魔理沙「外に出ろだと！此処は私の家だぜ！」

「いいから外に出て遊んで来なさい！」
魔理沙の反論も虚しく、シンヤから言われた通りに外へと出た。

中でシンヤが大暴れ（大掃除）を始めたのが、外でも分かる位、家の窓からホコリが煙の様に吹き出していた。

「あら？おじ様が来ているのね」
家を掃除されるのを見て悔しがる魔理沙の所に、同じ魔法使いで、

同じくこの魔法の森に住む、
「アリス・マーガトロイド」だ。

魔理沙「そうだけ。あのじい、いつか覚えていろよ」
アリス「毎度言うけどアンタが原因でしょ？、自分で掃除すれば良

いのに」
魔理沙「だから私なりに掃除しているのに、このありさまだぜ?!」

ゴミ溜めなのに掃除したのか。とアリスは心情にて呆れを感じる
しかなかった。

「うへえ。ガラクタが多すぎるだろこの家」
魔法店の入り口から、大きなゴミ袋を抱えたシンヤが現れ、アリス

がいるのを確認すると、ゴミ袋を近くに置いて、アリスの方に向かって来た。

「久しぶりだなアリス、お母さんは元気かい？」
アリス「ふふ、お母さんはいつも元気ですわ、おじ様」

「そうか、あいつに送る手紙を最近書いてないからなあ、どうしてると

思ったが、アリスが言うなら想像がつかない」

シンヤとアリス、二人で会話しては昔を懐かしんでいると、シンヤは何かを思い出したのか、アリスに待っていてくれと告げて、魔法店に戻っていった。

魔理沙「そう言えばアリスは、いつおっさんと会ったんだぜ？」

アリス「私が幼い時に魔界で会ったわ」

魔理沙「魔界で？そうなるって幻想郷に来る前か？」

アリス「そうなるわね」

魔理沙「幻想郷に来る前で、アリスがまだ幼い頃となると、おっさんいくつだ？」

アリス「それは分からないわ。だって、おじ様自体がもう何年生きているか分かってないのよ」

魔理沙「じゃあ、会った時から魔法が使えてたのか？おっさんは？」

アリス「ええ、魔界に来る前に、元々から使えてたみたいで、お母さんまで驚いていたわ」

魔理沙「へえ、アリスのお母さんが驚く魔道士なら、大魔法使いになってもおかしくないな、おっさんは」

アリス「・・・、もしそうだったら？」

魔理沙「大魔法使いだったら、おっさんの持つ魔法を全て教えて貰うぜ」

アリス「そう」

魔理沙「おい？何だよその反応は？・・・もしかしておっさんはh

「おーいアリス」

アリスに問いたただそうとした魔理沙だが、丁度シンヤが魔法店から出て来た。

「ホイこれ、魔理沙の寝室にあった魔道書、持ち主アリスだろ？」

シンヤが渡したのは、アリスの魔道書ばかりであり、それを見た魔理沙は渡すなと言う表情で訴えるが、無視される。

アリス「ありがとうね、おじ様」

「なあに、今度はパチュリーの所に行って、魔道書を返すだけさ。魔理沙を連れてな」

魔理沙「はあ?!聞いてないぜ?!」
その後、シンヤはアリスに別れを告げ、魔理沙と共にパチュリーの
所に向かった。

ルーミアとの日常

今日は雲一つない快晴。

自由な魔道師シンヤは、人里から離れた草原にて日光浴（昼寝）を楽しんでいる。

心地よい風、風が運んで来る草木の匂い、風によって揺れる草木達の音。

全てを感じながら、日光浴を楽しんでいると、ぐーぎゆるる。

そんな感じの腹の虫が鳴く音が遠くから聞こえる。

来たなと口ずさんだシンヤは、魔法にて数多くの弁当箱を取り出し、敷物やら飲料水なども取り出して準備していると、

「わはー！」

可愛い声でシンヤに抱きついて来たのは、黒を基準としたゴスロリで、カチューシャを着けた金髪の少女。

宵闇の妖怪、ルーミアだ。

「今日も来たなあ？、この食いしん坊が」ワシヤワシヤ

ルーミア「来たのだー！シンヤの作る料理は最高なのだー！それが月の一度しかないから楽しみなのだー！」

「そうかそうか。だがちよつと待っておけよ、もう少しで終わるからな」

ルーミア「わかったのだー」

そう言つてルーミアは敷物に腰を下ろし、とびっきりの笑顔で左右に揺れながら待つ。

月の一度にルーミアとシンヤは、この草原にてランチを楽しむのが日課である。

そもそもこのようになったのも、シンヤが初めて幻想郷にやって来て間もない頃だ。

たまたま見つけたこの草原にて先程のように日光浴していると、腹の虫が鳴く音が聞こえた木の裏を確認すると、ルーミアがいた。

この時に持ってきていたランチをルーミアに食べさせ、それを気に

入り、月一度のランチを楽しむようになった。

だがそれは、ある条件をルーミアと約束しているからだ。

「寺子屋はどうだった？」

ルーミア「楽しかったのさー！今日は、チルノ達と鬼ごっこしたり、大ちゃんに勉強を教わったりしたし、授業中に居眠りして、慧音先生に頭突きされたのさー！」

「そうかそうか。最後はルーミアが悪いな、今度は居眠りしないようにしような」

ルーミア「わかったのさー！」

その条件とは寺子屋に行くこと。

人里の寺子屋は、人、妖怪、人種を問わず授業が受けられ、俺の知り合いの妖怪や妖精がそこにいる為、ルーミアを通わせる。

1日もサボらずに寺子屋に通えば、此処でランチを食べさせる条件で約束した。

一通り準備が終わると、いただくのさー！

ルーミアはランチのサンドイッチを口に頬張り、おいしい笑顔でサンドイッチを食べる。

そんな笑顔を見ながら、シンヤもサンドイッチを口に入れる。

草木の匂いを感じながら、サンドイッチを食べるシンヤとルーミア。

終わった後は、二人で日光浴を楽しんでいた。